

大学改革の意識を探る

——「教養教育に関するフォーラム」から——

中野和朗

大学改革は、大学人の意識改革だといわれている。すべからく改革などというものは、上意下達などによって達成されたためしはなく、底辺からの幅広い共通の意志に拠って為されるものである。

本学における今回の改革も、もともと全学的に潜在していた改革の要求が、「大学設置基準」の「大綱化」に触発されて顕在化したものであり、3年に亘る全学の論議を経て実現したものである。その論議がじれったいまでのボトムアップのスタイルに徹していたことを想い起すと、これが幅広い共通の意志形成に役立つ、それが、他の大学に較べてとりわけ困難な条件をかかえている信州大学の改革を「信大のミラクル」と取り沙汰されるようなものとして実現させたのだと思われる。

本学の改革に対する全学教官の意識は、この論議の課程で、確実に啓かれ、一定のレベルに達したことは間違いない。だからこそ、他の大学にない高いハードルを見事にクリアしてきたのであろう。

とはいえ、改革の中身は未消化の部分、問題解決が先送りされた部分、これまでの慣習を引きつった部分、現実的妥協を余儀なくされた部分等々といった多くの未熟な点をもっていることは否めない。一回限りで一件落着といけばこんな目出たいことはないが、来たるべき世紀にふさわしい信州大学創りは一朝一夕にして出来るものではない。二次三次の改革を積み重ねることによって、より理想的なものへと近づける息の長い根気の要る仕事である。本学が求める理想的な大学像を実現するための改革の成否の鍵は、全学が改革意識を絶えず洗練し、改革努力を継続できるかどうかである。

こういう視点から、現時点での本学教官の改革意識はどのようなものであるか、である。「教養教育フォーラム」は、期せずしてこの点を探る上でひとつの格好の手掛かりとなっているように思われる。

ところで、本学初のフォーラムのテーマが何故「教養教育」かといえ、これが大学改革にとっていま最も重要と考えられているからであろう。つまり、「教養教育」については、「学校教育法」では「大学は、(中略)知的、道徳的及び応用能力を展開させることを目的とする」(第52条)と書かれており、「大学設置基準」では、「大学は、(中略)幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」(第19条第2項)と書かれていて、これをどのようにカリキュラム化するかが、大学改革の中で問われているからであろう。しかし、「教養教育」の改善努力はたしかに重要ではあるが、それが改革の自己目的なのではない。大学改革の目的は、抽象的な云い方ではあるが、例えば本学を世界に通用する魅力的な大学らしい大学に創りあげることである。そのためにこそ大学教育の改善努力が必要なのである。しかし、この発想は逆立ちした発想で、本当は魅力的で良い教育が行われていれば自ずからその大学はそれ相応の評価を受けることになる、という方が真当かもしれない。いず

れにせよいま取り組まれている改革が抽象論議で終わらないようにするためには、本学が理想とする大学像が具体的に、設定されているのでなければならぬし、その実現のために全学が燃えあがっていなければならないだろう。今回のフォーラムはまさにこのような状況を醸し出すための酵母のような効果を発揮することが期待されているように思われる。

さて、こういう視点から、フォーラムでの意見を総括すると、本学の改革の展望は必ずしも暗いものではない、といった程度には評価できるのではないだろうか。とはいえ、参加者は、大ざっぱに云って、本学教官の900分の35名であり、しかもこの35名は大学改革に積極的な関心を持っていると思われる先生たちばかりであるので、そういう先生たちの意見を基に全学の意識一般をおし測るなどということはたいへん乱暴なことといわねばならない。しかし、こういう限定を承知した上で、フォーラムでの個々の発言を踏まえてそこからうかがえる本学の改革意識を探ってみることにしよう。

まず、「教養」概念把握と「教養教育」理解についてである。この点では、テーマの性質からいって、また、論のたつ大学の先生たちの論議であるので、人生観の数だけ多彩な意見が出、真剣であればあるほど抽象論議となるのも止むを得ないであろう。

その中で印象に残った意見を2つ3つ挙げると、それは次のようなものである。

「それぞれの学問を通じて世界観、価値観について教育することが教養教育。人間のあり方を追及していくことが教養である。」

「精神なき専門人、心情なき享楽人では駄目、正しい判断力の前提に広い知識、歴史や文化についての理解が必要。人間について知らなければ技術は役に立たない。」

「社会が当面している諸課題を授業に組み込み、学生に課題を認識させること、データを示して考えさせること、そして懐疑的精神を培うことだ。教養教育では日本国憲法と教育基本法に立ちかえって行っている。」

これらはしごくもっともで、なるほど、と納得させられる見解である。しかし、いずれも「総論」の見解なのである。「総論波乱なし、各論大波乱」ということはどこにでもよくあることだが、今回のフォーラムも総論では「教養教育」が、大学教育にあって大切なものだという点では全く異口同音であった。しかし、問題は、これをどのように行なうかである。つまり、教養教育の「方法論」の面で考えると、上に挙げた印象深い見解もにわかに焦点がぼやけたものになってくるのである。なぜかといえば、長い間慣れ親しんだ「教養部」体制の中で、私たちの頭の中に「教養教育」と「専門教育」は、切り離せるものであり、別々のものとして教育出来るもの、しかも「教養教育」は予備教育的なもの、という固定観念ができてしまい、これらの見解には、この固定観念が暗黙の了解となっていることが感知されるからである。

今回の大学改革は、水平・積み上げ方式の課程区分を廃し、垂直・並行型の一貫教育としたところに特色があるのであり、改革を成功させるためには、一日も早くこの固定観念の呪縛から自らを解き放ち、水平・区分型から垂直・統合型へと意識を切りかえる必要があるのである。この「意識改革」の面からみると、「教養部廃止は間違っただけではないか。現状（全学出動体制）では、教養教育が（責任をもって）行なえるか不安である」とか、「全学協力体制で全教官が教養教育を均等に担当すべきというが、自分は（長年専門教育に専念してきたので、）教養教育にどのように貢献できるのか解らない。（教養教育の責任部局であっ

た)「教養部」の廃止の理由が解らない。」といった意見が、少数ではあるがあった。(大学全体としては決して少数とはいえないであろう)大勢が「教養教育課程」区分廃止を是とする前提の論議の中で、それに反して自分の気持ちを正直に述べる勇氣には敬意を表するにしても、この意見はまさに意識転換のできない典型的なものである。

これらの意見に特徴的なのは、大学教官には「教養教育の専門家」と「専門教育の専門家」がいるという妄念にとりつかれていることである。こういう妄念は、理工系の学生に「専門バカ」が多いということに対して、それは「教養教育課程」での教育が悪いからだと告発してはばからないのである。しかし、これほどの偏見と独善はない。それはまさに教養の欠如そのものを示している。「専門バカ」はまぎれもなくこのような教養の欠如した「専門教育の専門家」の手によって作り出されるのである。このことへの真摯な反省が望まれるのである。

しかし、一方このような意見に対し次のような意見は、改革についての高い意識が少なくないことの証である。

「知的能力、創造力の涵養は大学教育の目的である。しかし、それは『教養教育』というものによってなされるわけではない。そもそも『教養』という学問分野はない。教養教育と専門教育の違いは、分野の違いではなく、教育目的の違いである。」

「今までは、教養の名のもとで準備教育をやらされてきた。大切なことは、自分の専門を踏まえながら、さらにその枠をのりこえて他の分野を含めて教育する勇氣が必要。だから教養教育は幅広く扱えるベテランの教師が担当するのが望ましい。」

「一貫教育を各学部で鮮明にすれば、専門に合わせた教養教育があるはず。誰かが教養教育をやってくれるという意識が問題である。」

以上、今回のフォーラムの発言の中から、本学における大学改革の意識を探ってみたが、勿論これで全学の意識の動向を定めることなどとても出来ないことである。

いまの大学改革は、大学人の意識改革だといわれている。この小論が、意識改革への一石となれば幸いである。

信州大学教育システム研究開発センター
カリキュラム応用設計研究開発分野
教授 中野和朗